

曇りの青空

福井の女性キャリア相談記

松岡 幸代

11

Kさん、三十五歳。独身。今の働き方に満足できない、という理由でゼンターを訪れた。

県外の大学に進学したKさん。花の学生生活も終わりに近づき、卒業後は福井に戻るといって両親との約束どおり、地元で就職活動を始めたが、折しも就職氷河期の真っただ中。受けては落ち、受けては落ちの連続でなかなか就職先が決まらない。自分の人格すら否定され続けているようで、つらい日々が続いた。

正社員として入社したが、就職浪人だけは避けたい。最終的に、興味のある業界の会社に派遣社員として勤めることに決めた。そして、晴れて社会人となり、希望と少しの不安を胸に歩みだした。

分厚いファイル、ひっきりなしに鳴り響く電話、長時間にわたる会議。そんな大人の世界に戸惑うことも多かったが、見るもの聞くもの新鮮で楽しかった。一日でも早く仕事を覚え、一人前として認められるよう積

「派遣」という不安定身分

極的に仕事に取り組んだ。

「でも、もっと仕事を任せてほしいと思って

も、どんなにその仕事に詳しくなっても、正社員として入社した後輩に追い抜かれてしまうんです。やっぱり派遣社員は正社員にはかなわないんです」。正社員との格差を感じ、社会人として自信のもてない自分が嫌で仕方がない、そう言うて目を赤くするKさん。区切りをつけようと、何

度も正社員を募集する会社に挑戦してきたが、思いどおりにはならなかった。

私には、Kさんの焦りと苦しみが届くほど伝わってきた。今更ですと、

くじけそうになる自分を励まし頑張ってきたんだよね。もう自分を追い詰めてなくていいよ……

「頑張り屋さんのKさんだから、仕事をしながらいろんなことにチャレンジしていたんじゃないですか?」。私からの質問にKさんは、思い出しながらゆっくりと話し出した。「えっと、二年前にパソコンの資格を取って、二年前にはファイナンシャルプランナーを取りました。なかなか話

せるようにならないけど、去年から英会話の勉強を始めました。趣味で陶芸も。この前の休みに陶芸仲間と沖縄に行ってきた。話は尽きない。

「すごいじゃないですか! 充実していますね。仕事とやりたいことの両立、まさに『ワークライフバランス』、バッチリですね」。私はKさんの今までの十数年間を肯定した。「言われて初めて、そうか、と気づきました。今の働き方だったからできたのかも」と意外な表情でそう話すKさん。「そうですね。この働き方が合っていたのかもしれませんね」。そして、最後に一つ質

一度立ち止まり再考を

問をした。「Kさんが働く際に『これだけは譲れない』と思うものは何ですか? 給料の額とか福利厚生とか」。すぐさま「安定です、身分のでも、やりがいも同じくらい譲れないです」と答えが返ってきた。「じゃ、次回はそれらを手に入れるための話をしましょうね」と促すと、Kさんは元氣よく返事をした。

世の中に山ほどある仕事の中で、ある一つの仕事に就くのは、縁みたいなもの。うまくいくときは何の障害もなく決まっていくなのに、どうあがいても駄目なときだってある。自分の力ではどうしようもないその時は、

一度立ち止まって、足元はどうなっているのか、周りの景色はどうか、を見る余裕が必要なのかもしれない。

(福井新聞社提供)



イラスト・多田くにお